

科学技術コミュニケーション推進事業機関活動支援型
平成 27 年度採択企画
実施報告書

1. 企画名

がんにいどむ！先端がん医療～がん治療を選べる時代がやってきた

2. 提案機関名

特定非営利活動法人くらしとバイオプラザ 21

3. 提案企画の概要

従来の制がん剤と異なる新しい領域のくすり「抗体薬」が研究開発され使われている。不治の病といわれたがんの患者に、大きな希望を与えるものである。ふたりに一人ががんになる時代、がんの種類によっては完全に制圧でき、明るい将来があると知ること、患者、殊に高齢の患者と家族が前向きになり、社会に連なろうとする意欲を持つ可能性がでてくる。東京のベッタウン、三鷹市で三鷹ネットワーク大学の協力を得、医師、薬剤師、専門家（製薬企業等）、ジャーナリストを迎え、抗体の基本的な知識と先端医薬の話題を提供し、抗体薬を中心にがん患者と家族の QOL の維持・向上について考えるサイエンスカフェを開催する（各回 20 名・全 4 回）。

4. 企画の特徴

・テーマの新規性

がん予防だけでなく、国民病としてのがん患者、家族、医療関係者だけでなく、がんでない人も、情報を得て共生できる社会を考える、今までにない視点で、いろいろな立場の講師を迎えて行うバイオカフェである。

・いろいろな立場の人にとってわかりやすい

少子高齢化社会である現実を念頭において、高齢者を含む成人を対象にし、いろいろな立場の講師を招く。わかりやすいお話、視覚的な説明、まとめを行い、理解度を高めるようにする。ここでは、長年のバイオカフェの経験とネットワークを活用する。

・科学にとどまらない発展性

高齢者を含む患者と家族が前向きに生きがいのある生活ができるようにする。高齢者の課題を抱える、三鷹市など多くの自治体に展開することができる。さらに三大疾病をテーマに、拡大し高齢者の前向きなメディカルリテラシー向上にもつなげられる。

5. 総合所見

目標の成果が得られ、科学技術コミュニケーションが推進された。

安定した運営体制で予定していた内容は一定程度、実施しており、その成果は評価できる。

しかしながら、参加者が「がん」に対しての正しい理解だけでなく前向きな思考を得ることが出来たかどうかは疑問が残る。今回のカフェ参加によって、参加者が、がんについてどの程度科学的に理解したか、がんについてさらに何を知りたいと思うようになったのか、がん治療についてどのような期待と懸念を持ったか、を明らかにしたうえで、今後の取組を展開すべきである。さらに今後は、がんおよびがん患者との関わりのない人の参加が多くなるのがカギと思われる。課題に直接関係のある人だけでなく「なんとなく不安」、「なんとなく関心」ある人たちが参加したくなるにはどうすればよいか、についても検討していただきたい。

6. 実施者からPR・感想について

がんにいどむバイオカフェ（バイオに特化したサイエンスカフェ）を、三鷹ネットワーク大学で全4回、研究者、ジャーナリスト、医師を招いて行いました。

1. 「どうしてがんはできるのか」
2. 「ジャーナリストからみた日本人のがん」
3. 「がん治療の最前線と新薬実現へ向けて」
4. 「がん治療のいままでのこれから」

国民の二人に一人が、生涯の間のがんと診断されるという時代。これはがんが加齢によって起きやすくなる「遺伝子の変化」と関係しているためです。がんの患者数も増えましたが、がんの治療も多様になり、日々、進歩しています。

会場では、クイズをしたりして双方向性を高めるようにし、ナビゲーター（元くすりの適正使用協議会事務局長）が毎回、全4回の流れを説明し、1回しか参加しなくても4回シリーズをイメージしていただけるように工夫しました。

参加者は個人的な病気相談のような質問をしないというルールを守り、いろいろ立場の人が互いを尊重しあいながら話し合いました。



バイオカフェ会場風景1 「がん治療の最前線と新薬実現へ向けて」



バイオカフェ会場風景2 「ジャーナリストから見た日本人のがん」

以上